人口減と働くがん患者増

がん社会を診る

中川 恵一

約30万年前にアフリカで誕生した私たち人類の総出生数は、約1000億人とされています。

人口の増加は3つの革命がきっかけとなりました。まずは約1万年前、農耕が始まり、文明が誕生しました。ただ、人口増加はゆるやかなものでした。

現在に至る人口増加の主因とされるのが、約200年前の産業革命です。人類は蒸気機関によって石炭から莫大なエネルギーを手にしたのです。品種改良や化学肥料の大量投入などにより農業の生産性が向上した「緑の革命」も人口爆発に大きく寄与しています。

1800年に約10億人だった世界人口は今、80億人を超えています。これほど爆発的に人口が増えたのは、人類の歴史でもこの200年にすぎません。

今後、人類の数は減少に転じようとしています。米ワシントン大学は2020年、世界人口は64年の97億人をピークに減少するとの予測を発表しています。人類の数はこれまで考えられていたより、ずっと早く減り始める可能性が高いといえます。

人口減の主な理由は、世界中で予想を超えて進む少子化です。背景には女性の教育と社会進出があげられます。

女性1人が生涯に産む子供の数（合計特殊出生率）は22年に世界で2・3となりました。人口が増えなくなる2・1が目前に迫っています。

日本は少子化のフロントランナーで、23年の合計特殊出生率は1・2と過去最低を記録しました。韓国はさらに深刻で、23年の出生率は0・72。このままでは国の存続が危ぶまれます。中国も出生率の低下が著しく、22年は日本を下回る1・1でした。生まれる子の数もたった7年で半減しています。

日中韓に共通するのが、儒教的な社会通念が根強く残り、女性を縛っていることだと思います。韓国と中国は経済が十分発展する前に高齢化が始まっています。日本では高齢化と経済成長が並行して進行しましたから、まだ救いがあるといえるでしょう。

少子化による労働力不足を解決するには、働く人を増やすか、生産性を上げるかしかありません。日本の女性と高齢者に働いてもらう他に道はありません。

がんは一種の老化ですから、年齢とともに急増します。ただ、乳がんと子宮頸（けい）がんは老化とは関係がない要因で若い頃から発生しますので、50代半ばまでは女性の方が患者数は多くなります。

働くがん患者がますます増える「がん社会」は必定。次回は、生産性の向上と出生率のアップを成し遂げた伊藤忠商事の取り組みを紹介します。（東京大学特任教授）

イラスト　中村　久美